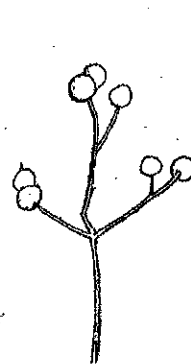
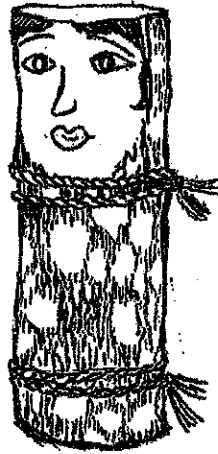


門の棒



蕪玉

～季節だより～

小正月の行事

新しい気持ちでスタートする1月を迎えました。私たちは、日々の暮らしの中でいろいろな願望を持ち、それをかなえるために努力をします。一方で正月の初詣などは神仏にご加護をお願い事をします。今回は、奥多摩町川野地区に残る小正月行事のいくつかを紹介します。

全国的に1月15日を中心に小正月といい、農作物の豊作を祈願する習慣があります。かつては、蕪玉や小豆粥をはじめ、どんど焼きなどがどこでも行われていたものが、時代とともに多くの地域で姿を消してしまいました。ところが、奥多摩湖の中ほどにある川野地区では、この伝統ある民俗行事を今でも地域住民の力で守り続けています。

◆どんど焼き

1月14日夜6時から川野の広場で松の枝を積み上げて燃やします。蕪玉を木の枝にさしたものを事前に戸数分用意しておきます。

人々は、その場で焼いて食べる人、家に持ち帰る人などいろいろですが、このような機会が集落の連携と交流の場として生きているのです。

◆門の棒

おっかどぼう（丹波山ではかんどどうしん）ともいい、60～80センチほどの長さに切ったヌルデという木を2本用意します。上部の皮を削り落としてそれぞれに男女の顔を書き、家の前に立てたり氏神様に奉納します。これは子孫繁栄や家族安寧を願う道祖神で熱海地区以西から丹波山村方面で行われています。

◆俵作り

20～30センチほどの長さに切ったヌルデの切り口に金、銀、米、粟、麦、豆などと書き神棚に上げたり蕪玉とともに飾ります。これを俵と呼んでいますが、最近では、寿とか健の字なども書かれるようになりました。

小正月行事でどんど焼きだけは、集落単位で行われますから、地域の方にお問い合わせ、行事に参加したり見学することは可能です。

冬の奥多摩は寒いだけではありません。夕闇に映える手作りの真っ白な蕪玉をほかほか焼いて食べたら、この1年風邪を引かないとされています。

(岡崎 学)

～ 来 さ っ せ え ～

冬の奥多摩でバードウォッチングはいかが

初冬、樹々が葉を落とし眠りにつくこの時期から初夏にかけて野鳥達の姿が見やすくなる。そして、北方から冬鳥達がやって来る。日本全土で年間に観察される野鳥は約520種、そのうち、奥多摩では約100種ほどが観察されている。

さて、そのうちこの時期にどれぐらいの種類の野鳥が奥多摩で見られるだろうか。まずはこの時期、北方より渡って来る冬鳥がみられるだろう。ツグミ、ジョウビタキ、アトリ、カシラダカ、ヒレンジャク、キレンジャク、そしてカモ類などの水鳥達。ルリビタキ、シメ、ウソ、イカル、アオジ、ビンズイ等々。そして四季を通して、同じ地域にとどまっているスズメ、モズ、キジ、ヤマドリ、ヒヨドリ、コゲラ、ムクドリ、ホオジロ等の野鳥達。奥多摩のここかしこが野鳥達でにぎやかになる。さあ、奥多摩へ野鳥達の愛らしい姿を見に行こう。ただ奥多摩の冬はことのほか寒い。十分な防寒対策を。

次に、バードウォッチングを楽しんでいた



コゲラ

く上で提案がある。

1つは、野鳥達の微かな声や、姿を感じたら追いかけたり、歩き回ったりしないで、その場でじっとしている……寒いけど辛抱しよう。温かいコーヒーでも飲みながら。野鳥達は人間の動きに敏感である。人の気配を感じたら野鳥達はすぐに移動してしまう。

2つ目は、冬の時期、カラ類（ヒガラ、コガラ、シジュウガラ）やホオジロ、カシラダカ、コゲラなどは群れで生活している。双眼鏡の狭い視野で追っかけるより、自然の中の景色として、自身の目で、愛らしいかれらの姿を見る幸福をあじわってほしい。運がよければ数十羽の群れを手の届くような距離で見ることが出来る。感じる事が出来る。

最後に奥多摩でのバードウォッチングのフィールドを紹介する。

- ① 奥多摩むかし道
- ② 奥多摩湖周辺
- ③ 日原林道

他

(畑 幸夫)

～ 行 っ て 来 た ん だ ～

関東ふれあいの道(7) -山草のみち-

山草のみちはコースの大半が多摩川と荒川の分水嶺にある。清東橋から百軒茶屋、奥茶屋と進み、ここから大丹波川左岸へと道は続く。道は山葵田、小さな滝を見せながら沢沿いに続き左岸から右岸となり、やがて畠山荘司重忠の由緒を持つ小さな祠を右手にみると、沢筋から人工樹林帯の薄暗い急坂道へと入る。台風、その後の豪雨の跡が目には痛い。露出した木の根に注意して登ろう。

棒の嶺山頂の展望は素晴らしい。北西方向に県境尾根から奥武蔵への山並みを作る、タタラの頭、大持山最後に武甲山と、いずれも1200m級の山容である。眼下に名栗湖、伊豆ヶ岳を見据え、関八州見晴台から堂平山まで900m前後の山々が奥武蔵高原の西の涯を為し、遠見には東の筑波山から左方に西上州の冠雪の山並みを望む。昼食場所はここより他にないだろう。

道は、東南に伸びて急勾配を作り、ゴンジリ峠で

名栗方面からの登山道を左に合わせ、黒山(842m)で県境尾根を左に分岐する。緩やかな登降の稜線から西方には本仁田山、川苔山を始め奥多摩の山々の展望が楽しめる。道筋では、赤白紫黄と百花繚乱ならぬ、極彩色のきのこがドーダと言わんばかりに人目を引く。見事な色はともかく、良くまあ毒キノコばかりが集まったものと感嘆する。800m前後のピークを3つほど越えると岩茸石山直下の名坂峠である。

峠は古来より集落を結び重要な生活道であった。名坂の由来(難儀な坂、泣き坂、涙坂等言われる。)に思いを馳せ、麓に祀られている観音様に昔の村人たちの情を偲ぶ。

山草のみちはそんなふれあいもある道だった。名坂峠も又多摩川と荒川の分水嶺である。峠を後に急な勾配を慎重に下り観音堂を過ぎると街道大丹波秩父線に出る。終点の北川橋バス停は直ぐそこである。

(磯田益男)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その6 ～

トレイルラン

30年ほど前ベストセラーになった本に「かもめのジョナサン」があった。プロの飛行機乗りであるリチャード・バックの書いた寓話を、五木寛之が翻訳したものである。すべてのカモメにとって重要なのは、飛ぶことではなく食べることであったが、この風変わりな主役のカモメ、ジョナサン・リビングストーンは、食べることよりもいかに速く飛ぶか、いかに遠くまで飛ぶか、「飛ぶこと」それ自体が重要だったのである。群れを追放されたジョナサンが、飛ぶことの喜びを味わうために、自由と愛することの真の意味を知るために、光り輝く蒼穹の果てまで飛んでゆく。夢と幻想のあふれるそんな物語であった。

最近山を歩いていると、軽快に登山道を走って登り、降りする人たちが目に付くようになった。トレイル（登山道）ランニング（走る）で、トレイルランナーと呼ばれる人たちだ。「山を走ってはいけない」などという規則はない。「いかに速く走るか、いかに遠くまで走るか」と山の中を走ることの喜びを見いだした、山のジョナサンたちだ。今ではトレイルランナー人口も増え各地でイベントやレースも行われている。青梅署管内だけでも4月の「高水山トレイルラン」、5月の「チャレンジャーズ・レース」と称する100キロトレイルラン、10月の「日本山岳耐久レース」、12月の「みたけ山山岳マラソン」などと奥多摩の山を駆け抜けるレースが目白押しだ。

10月20日（土）、東京都山岳連盟主催の（第15回日本山岳耐久レース「長谷川CUP」71.5km）で遭難事故が起きた。日本山岳耐久レースは五日市をスタートし、戸倉三山を登り、笹尾根から奥多摩三山（三頭山、御前山、大岳山）を縦走、御岳山、日の出山を経て金比羅尾根を五日市に下る71.5キロのコースを、24時間以内でトレイルランするという過酷なレースだ。

20日、私はたまたま休みだったので、発着地である五日市まで出掛けた。青梅警察署山岳救助隊からこのレースにランナーとして参加する佐藤隊員の応援と、親しくお付き合いさせて頂いている主催者、森谷都岳連会長を激励するためである。

爽やかな秋晴れとなつて、五日市の町は耐久レース一色に染まっていた。聞けばレース参加者は2000人を超えているという。初めて見学する私は、全国から集まったこのアスリートたちのムンムンする熱気と盛り上がりには驚いた。いまやトレイ

ルランも立派に市民権を得たスポーツになったことを実感させられた。

山岳救助隊で一番若い佐藤隊員も、いっばしのトレイルランナーの格好で、出発会場となる五日市中学校のグラウンドにいた。「おまえ途中で棄権なんかしたら山岳救助隊を降ろすぞ」と気合を入れた。挨拶に行ったら、主催者の森谷都岳連会長もこの盛り上がりように喜んでいて。

開会式のセレモニーが終わって、午後1時にスタートした。狭い門から続々とランナーが出てくる。私も出口で佐藤隊員を待ったがなかなか出てこない。号砲が鳴って5分もしたころ、どん尻に混じってやっと出てきた。私は「にこにこ笑って手など振ってこのバカが、何でもっと前に並ばなかったんだ、棄権なんかしたらただじゃおかんぞ」と独りごちた。ランナーがすべて走り去ってから私は気持ちの良い秋晴れの中を自宅に帰った。

翌朝日曜日、私は出勤なので青梅線の電車に乗った。昨夜は何の連絡もなかったから、無事耐久レースも運んでいるのだろうと思っていたら、佐藤隊員から携帯電話にメールが入った。「完走しましたよ、15時間でした。夕べ遅くレースで転落事故があり、男性が死亡し、救助隊が出動。森救助隊長以下がまだ帰っていません」という。「初めてのレースにしてはまあよくやった。それで転落場所はどこだ」とメールを返すと「小河内峠と惣岳山の間です」という。あのギャップか。小河内峠の少し先にあるギャップだ。左の小河内ダム側が切れ落ちている、落ちるとしたらあそこしかないピンときた。何ということだ、気を遣って誰も私には連絡しなかったものだろう。

奥多摩交番に着いたら、佐藤隊員は五日市からの一番電車でもう帰ってきており、無線で連絡に当たっていた。場所はやはりあのギャップで、以前にも登山者の事故があったところだ。遭難者は180メートルほど転落しほぼ即死状態。先ほど消防のヘリに吊り上げ病院に運んだので、出動した救助隊員はいま下山中だという。

しばらくして下山した山岳救助隊員が引き上げてきた。森救助隊長から状況を聞いた。

事故は20日、午後11時25分ころに起こった。遭難者はレース参加者の男性で、都内S区在住のTさん（40歳）。スタートから約45キロ地点、小河内峠先のギャップのある登山道から奥多摩湖側の急斜面を転落した。近くを歩いていた参加者2名が目撃し、上から声を掛けたが応答がなかつ

たため、携帯電話で119番通報したものであった。

午後11時29分、消防庁から110番に転送され山岳救助隊を招集。21日となった午前0時20分、森救助隊長以下5名が奥多摩交番を出発し、3名は奥多摩周遊道路の月夜見第二駐車場から、2名は小河内ダムサイトからそれぞれ入山し、午前1時41分、転落した尾根上に到着した。

間もなく到着した消防の救助隊と協力し、尾根上から100メートルザイルをセットしてルンゼ状の急斜面の下降を開始したが、100メートル下降しても遭難者を発見できず、ザイルを掛け替えさらに下降。登山道から約180メートル下降し、午前2時40分Tさんを発見した。しかしTさんはすでに心肺停止状態であった。

小河内峠から稜線に平行して150メートルほど下を水源林の巡視道が通っている。Tさんはそれより30メートルも下まで落ちている。とりあえず安定した巡視道まで担架に乗せ引き上げることにした。真っ暗な中、ヘッドランプの灯りのみの救助作業は二次災害の危険も伴う。慎重に作業を進め、巡視道まで引き上げた。さらにヘリにピックアップ可能な場所まで約50メートル巡視道上を移動し、消防庁のヘリを要請した。寒かった夜も明け、飛来したヘリに午前6時50分収容し、青梅市立総合病院に搬送され、医師によりTさんの死亡確認されたものである。

昼ころになって、刑事課員が現場の実況見分をしたいということで、私が同行することにした。現場付近まで行き、見当をつけて多分落ちた場所はここだろうと、登山道の端から岩場の下をのぞき込むと、顕著な転落の痕跡があった。途中の立木に手拭いのようなものが引っ掛かっていた。私はブッシュに掴まりながら、慎重に下降してそれを取ってみると、やはり手拭いで、大相撲四十八手の図柄が描かれていた。刑事課員が本署に問い合わせると、Tさんがかぶっていた手拭いに間違いないと回答があった。

落ちた場所は、奥多摩湖に注ぐ水久保沢上流の詰めである。水は流れていないが急激に尾根に突き上げているルンゼ状のところ、登山道はそれを回り込むように、急に右下に下降するギャップになっている。その突端が垂直に近い5、6メートルの岩場となっており、Tさんは右下の下降路に気付くのが遅れ、思わずこの岩場に踏み込んでしまったのではないだろうか。岩場の下は急なルンゼ状の斜面である。途中からルンゼは左にカーブしているが、それに沿って転落の痕跡があった。

レースがスタートしてから10時間以上も経過

している。疲れもでるところである。睡魔も忍び寄るところである。真夜中の山、ヘッドランプの灯りで登山道を歩くには、相当の注意が必要だ。ちょっとしたミスが死に結びつく。総勢2003名が出走した中で、完走者は1540名というから、その人たちは何事もなくここを通過したことになる。Tさんの踏み込んだ、ただ1歩が悔やまれる。

TさんはK山の会に所属し、会でも有望株の山ヤであったと聞く。この日本山岳耐久レースも15回目を迎え、全国的にその知名度が上がってきている。しかし始めた頃に比べると、参加選手に山ヤの比率が下がり、ランナーの比率が増加しているという。トレイルランで私が心配していたのは、その山ヤでないランナーのことであった。確かに走り込んでいるランナーが参加すれば、記録は短縮する。しかし山を知らないランナーが山を走り抜けるということは、もし何かアクシデントがあった場合サバイバルできるか、という心配である。今回のような参加者の多いレースになれば、まず道に迷うなどということはない。これが少人数で長いコースともなれば地図読みも必要となろうし、山の気象、地形、装備、その他あらゆる山の知識がないと危険が伴うと私は思ってきた。それが今回、山ヤの参加者が事故死したのである。山ヤのひとりとして残念という他はない。

このレースは、社団法人「東京都山岳連盟」が主催するだけあって、計画性のあるしっかりした大会だと思う。早くから実行委員会を立ち上げ、実行委員長を中心に役員が準備作業に着手し、コース整備、関連団体との打ち合わせ、地元との連携などきめ細かく動いていた。安全面にしても独自の救助隊15名、医師3名、看護師4名、AED8台を各所に配置するなどの配慮があった。

しかしそれでも事故が起きた。山でするスポーツは、相手が大自然である。参加者はその自然の中での過酷なレースであることを、十分に認識したうえで自主的に参加している訳だから、自分の足で登り、自分の足で降りてくるという自己管理、自己責任が大原則である。レースの主催者側は、この事故で不備はなかったか、なぜ防げなかったかをじっくりと検証し、これからはさらに安全を重視した方向性を示し、継続していくことが遭難者に対しても報いる道だと思う。

大自然の中で自分の限界に挑戦してみるということは、カモメであっても人間であっても、とっても重要なことだと思えるからだ。

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(8)

鳩ノ巣駅から川苔山(かわのりやま)へ登るコースを1時間程登り上げた尾根筋に、「大根(おおね)の山ノ神」といわれる場所があります。その周辺は、横に深く掘り割られたような溝があり、まるで、山城の遺構かと思いたくなる地形になっていて、道の脇に山の神の小祠とそれを抱えるようにして朽ちた巨樹の根が見えます。大根の意味については、川苔山からつづく大尾根がその語源になっているといわれていますが、大きく根を張った大木が目印の山ノ神という意味にしてもおかしくはありません。

ここは、川苔山へ行く真中の道と、左へ本仁田山(ほにたやま)、右は峰平の集落へ行く山道の分岐点ともいえる場所で、昭和40年代をもって峰平の人たちが移転するまで、よく整備された道でした。

「昔、一座の者たちから遅れた一人の醫女(ごぜ・三味線を持ち、村から村へと門付けをしながら渡り歩くことを生業とする盲目の女旅芸人)が、棚沢から峰平の集落目指して登って行きました。大根の山

ノ神あたりで、杣人らしき人に出会ったので、峰平へ行く道を尋ねると、その人は、いたずら心をおこして高指山(本仁田山のこと、棚沢からの呼称)へ行く道を教えたのでした。醫女は、深い山の中をさまよい歩き、力尽きて、とある大岩の傍らで死に果てました。今でも雨の日にここを通ると、三味線の音が聞こえるといひます。」

これに似た話は、大字日原の平石(ひらいし・大沢国際釣り場の対岸)にもあります。「昔、秩父方面から来た醫女が、平石あたりまで来て道に迷って動けなくなり、大きな岩の傍らで、哭き叫びながら死んでしまいました。それから、この場所を『ごぜ岩』というようになりました。」日原川の左岸、平石地内には二つに引き離されたような大岩が立っています。この大岩は、御前岩(ごせいわ・醫女岩)といわれ、平石の地名は、この岩から付けられたのではないかと考えられます。

(岡部義重)

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま、奥多摩登山考

山の花だより

冬来たりなば春遠からじ。人間誰しも春を待つ心は同じですが、寒い冬といえども冬眠できないのが人類の定め。年寄りの冷や水といわれようと、若気の至りという言葉もあるくらいですから思い切って外に飛び出してみませんか。

冬の山道をただひたすらに歩くだけでは、物足りないという方、もっとゆっくりと歩いて木々の芽(冬芽)を見ながら歩いてください。

冬とはいえ、早春に咲く花は、既に花芽を準備しています。最近誰もが名前を覚えてくれたアブラチャン。渓谷に沿った道で見かけます。まん丸い小さな芽が印象的です。この木は、雌雄異株で雌木には、これまたまん丸い径1センチほどの実がたくさんあります。ほかに春を待つ木々の花芽としては、ダンコウバイやクロモジがあります。木には、それぞれ個性があり、いろいろな形の冬

芽があります。

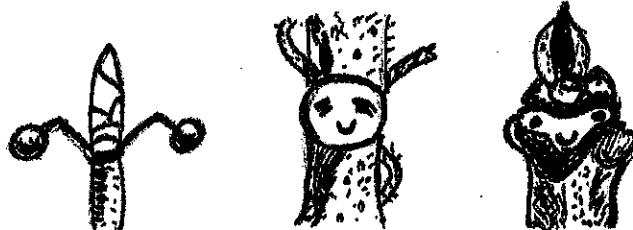
ユニークなのは、トチノキやタカノツメ。トチノキの冬芽は、光沢のある液体でコーティングされていて防寒効果抜群です。タカノツメといっても唐辛子ではありません。冬芽部分が鷹の蹴爪のように見える山の木です。

もっと楽しみたい方には、葉っぱが付いていた跡形(葉痕)を探すのも楽しいものです。有名なのは、オニグルミ。羊の顔そっくりです。羊が一匹、羊が二匹と数えてみてはいかが。おすすめはクズ。ごみクズのクズではありません。正真正銘、植物のクズです。笑っている顔、泣いている顔、

怒っている顔など見方次第でいろいろに見えるから不思議です。

冬の葉痕探しは最高の楽しみです。あなたの新発見を期待しています。

(岡崎 学)



ガイドだより ～秘湯・三条の湯～

私が「三条の湯」を知ったのは、今から44年前でした。

その頃は、今のように土曜日が休日でないため、11月23日の「勤労感謝の日」と年休を利用して、友人と2人、3泊4日で奥秩父主脈縦走のため、葦崎の増富ラジウム鉱泉から入山しました。

そして、金峰、国師、甲武信、笠取と縦走し、最後に飛竜からお祭りへ下る途中、雨の中、山奥にひっそりとたたずむ山小屋三条の湯に出会いました。しかし、その時にはその山小屋が温泉であることを全く知らず寄らずに先を急ぎました。

長い後山林道を下っていく途中で、軽トラックが我々に追いつき、疲労困憊の我々をお祭りまで荷台に乗せてくれました。

その時の親切な軽トラックは、三条の湯の木下さんではなかったかと、今になって思っています。

三条の湯に初めて泊まったのは、22年前で、三条の湯に泊まって雲取山に登る山行でした。

その時初めて山奥の温泉に入ったのですが、肌がツルツルとなり、いっぺんに好きになってしまいました。

それから今日まで、毎年のように12月に忘年山行として三条の湯に泊まり雲取山登山を繰り返し、今年で30回目になりました。

三条の湯へは、奥多摩駅から丹波行きバスに乗り、「お祭り」で下車、後山林道を3時間、登山道を30分ほどで行けます(林道終点まで車で入れます)。

雲取山、飛竜山の登山基地として、また奥秩父主脈縦走の東端として、私にとってこれからもお世話になり続ける山小屋です。

(横堀勝弘)

※ 三条の湯

200年ほど前、後山の猟師が手負させた鹿を追跡中、その鹿が傷口を湧水にひたして治療しているように見えたので、不思議に思い飲んだところ、鉱泉であることを発見したという。

当時は「鹿の湯」と呼び、猟師が小屋掛けをして狩猟足溜まりとしたところだが、登山熱が盛んになった昭和25年にりっぱな小屋となり、その名も「三条の湯」と改称された。

胃腸病、神経痛、創傷などに効果のある単純硫黄泉です。

(実業之日本社ブルー・ガイドブックスより)

施設案内

☆ 山のふるさと村

秩父多摩甲斐国立公園内にある都民の水がめ、奥多摩湖畔にあります。村内には、水道局が管理する水道水源林があり、その豊かな自然環境の中で、リスやムササビをはじめ、多くの生き物が暮らしています。

暖房完備のケビンサイトが特別割引

平成20年2月29日まで

4人用ケビン1泊 10,000円が5,000円

8人用ケビン1泊 20,000円が10,000円

お申し込み・お問い合わせ 0428-86-2324

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、冬から春に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 3月27日(木) 海沢カタクリと史跡探訪
応募締切日 3月10日(ハイキング)
- ② 4月3日(木) 数馬の切通しと海沢のカタクリ
応募締切日 3月18日(ハイキング)
- ③ 4月11日(金) むかし道に春の植物を訪ねる
応募締切日 3月18日(ハイキング)
- ④ 4月11日(金) 山開き式前夜祭
氷川キャンプ場
- ⑤ 4月12日(土) 山開き式 奥多摩駅前

* 募集人員：各回30名、参加費：500円

(④は飲食代として1,000円、⑤は無料)

《 編集後記 》

ご愛読感謝いたします。今年も奥多摩の情報発信を続けますので、よろしく願いいたします。

次号は、平成20年4月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会